

2021年度 神戸市外国語大学 学校推薦型選抜・社会人特別選抜 入学試験問題【小論文】

次の文章を読み、大学教育における教養学部（課程）の必要性について、どのように考えますか。あなたが大学で専攻したい研究分野や将来的な職業の観点から、その理由をあげて、800字以内で述べなさい。

教養（liberal arts）

中世の西欧では、「文法、修辭、論理、算数、幾何、天文、音楽」の「広範囲」にわたる学問分野が「リベラル・アーツ」とよばれていました。要するに、「物惜しみしない」で広く学問を習得する諸技能、それがリベラル・アーツで、それを訳して「教養」となったわけです。しかし、規律なしの学問分野などはありませんので、それをリベラル(自由)とよぶのは、誤解を招きやすい形容です。

その点を明確にするという意味で、独語の「ビルドゥング」（教養）のほうが的確です。ビルドゥングとは「形成」のこと、つまり、この場合は、「精神構造の組み立て」のことです。ここで構造というのは精神の「総体を見る」ことにかかわります。したがってそれは、「思想」（物事の全体にたいする感じ方と考え方と行い方）の別名とってよいものです。

ただし、その意味での教養は、かならずしも情報の多さをさしません。たとえば、たった一つの物事についてしか情報がなくとも、その多面多層を十分に感受し考察し関与することを通じて、その他の多くの物事についての思想に近づくこともできるのです。いわゆる職人芸はそうした類のものでしょう。ただ、それがビルドゥングであるからには、思想には、感受力や行動力も欠かせませんが、何よりも論理力が必要となります。論理力がなければ、物事の多面多層のあいだの組み立てがうまくいかないということです。

リベラル・アーツが「学芸」とよばれることがあります。ここで、「學」は「先人の知恵を真似すること」であり、「藝」が「草を執りつつ良い香りに包まれる」ことです。そういう境地に近づくには、やはり、ビルドゥングとしての思想を組み立てていかなければなりません。日本の大学では、教養学部無用論が流行るかと思えば、教養学部必須論への揺り戻しが起こったりしています。それは、学芸が名ばかりのもので、単に雑多な情報を乱雑に集めるのが教養の実態になってしまっているからなのでしょう。

「学術」の「術」とは「曲がりくねった道を行く」ことです。リベラル・アーツの「アート」というのもそういうことでしょう。そうした難しい営みが、教養に直接的に必要なだとは思われません。しかし教養には学術が待ち構えております。「思想の論理」を彫琢するには学術の手助けが欠かせないのです。

いえ、学術は日常（生活）言語に活かされなくては単なる「ジャーゴン」（隠語めいた専門語、jargon）の集まりとなるでしょう。日常生活での言葉づかいが、感受性の豊かなもの、行動性に連なるもの、そして論理性の強いものになること、それが学術語を（観念の次元に浮遊させずに）経験の大地に繋ぎとめるのです。

西部邁『昔、言葉は思想であった 語源から見た現代』時事通信社、2009年、204～206頁。（一部修正）